

地域づくりが自分の命題だと気が付いた20代 自分と向き合い、学び・研究し、現場に飛び込んだ30代



望月 貴文 (もちづき たかふみ) さん 栗山町地域おこし協力隊 (情報発信プランナー)

1983年札幌市生まれ。北海道庁退職と同時に北海道大学公共政策大学院に進学。リカレント教育の最前線で地域政策や政策学を学ぶ中、自治体の最前線に身を置きたいと考え、2021年4月より栗山町へ移住。北海道大学公共政策大学院附属公共政策学研究センター研究員

北海道に移住 (U・I・Jターン) して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーのかとうけいこさん。23回目となる今回は、栗山町と日本各地の情報発信のスペシャリストをつなぐ活動に取り組む望月貴文さんです。

地域づくりに主体的に関わるきっかけは？

北海道庁に入庁し、出先である室蘭で社会人生活が始まりました。半年が経ち、本業や社会的な立場を持つ多くの大人たちと出会い、地域づくりに熱中している姿を見て、公務員として自分の無力さを知りました。先輩たちの思いを聞くうちに、自分の中で「地域づくりを考えること」がすごく楽しくなり、次第に組織の

内の人だけではなく、外の人と積極的につながる必要がある、と気付くキッカケにもなりました。

転居を伴う異動が多い道職員は、3年ほどで別の地域に移動します。地域を離れる身分の自分は、地域を引っ張るような立場ではなく、客観・俯瞰的に地域を分析する立場として活動することも重要だと感じました。そのため、公の視点に民の視点を加えた両面で地域を捉え、経済性を含めた政策を地域で起こす人材になりたい、と次第に思うようになってきました。

なぜ公務員を辞して大学院で学んだのですか

30代に入り「自分の立ち位置はこのままで良いのか」という問いが、キャリアを重ねるうちに大きく膨んだことが一番の理由です。北海道庁は広域行政ですので、直接道民と接する機会がほとんどありません。日を追

うごとに地域の人たちと触れ合いたい気持ちが、その問いを加速することになりました。これからの人生を進むにあたり、一度、本腰を入れて自分の力を蓄える期間が必要では、と感じ大学院に進学しました。

地域おこし協力隊として、地域に入り込みたかったですね？

在学中は、道内の自治体職員も視野に入れていましたが、地域おこし協力隊としての進路もありと考え、現場で地域づくりができる場所を探していました。大学院の論文が「地域おこし協力隊の支援体制」をテーマとしていたので、研究だけで終わらず、自ら実践したい、という気持ちが強かったこともあります。

栗山町の募集内容を見て自分の経験と知識を活かせるのでは？と思い応募し、2021年4月から「情報発信プランナー」として活動をスタートしました。情報発信プランナーは「情報収集・発信体制の構築や新たな情報コンテンツの企画・制作・発信」を通して、栗山町の潜在的な価値を引き出すシステムづくりを求められていたので、あれこれ自分で考えることができ、楽しく活動をさせてもらっています。

採用され、最初に取り組んだのは何ですか？

着任から3か月目に「くりやまのおと」という町公式のnote*を立ち上げました。着任前後から栗山町のホームページやSNS、広報紙など目を通してみると、日々の出来事を記す「フロー情報」が多かったのですが、町の価値を高める「ストック情報」が少なかったことに気が付きました。

くりやまのおとは、栗山に溢れる音を「書き留める」「積み重ねる」「継ぎ合わせる」ことを目的として、日々栗山で暮らし活動するヒトやコトに焦点を当てています。今年7月で3年目を迎え、2年間で90近い記事を掲載しています。

栗山の広報紙「広報くりやま」でも一部の記事を執筆しています。広報紙は、スペースに限りがあるので、書ききれなかった部分をデジタルのくりやまのおとで発信しています。広報紙に関係する記事のQRコードを入れて、より深い話はこちらを読んでという仕組みです。

* note
文章をメインとした記事コンテンツを手軽に発信・共有できるサービス。

今年6月に「くりやま未来カフェ」というイベントを企画されましたよね

「自治体広報の最前線と栗山の情報発信のこれからを考える」というテーマで開催しました。自治体情報の核は広報紙ですので、実力のある全国の自治体へ赴き調査を行うなかで、愛媛県内子町の広報紙「広報うちこ」の完成度の高さと、広報に取り組むひたむきな姿勢に強く胸を打たれました。ぜひとも担当者を栗山にお呼びし、内子町のマインドを栗山町にも根付かせることができないか、という思いが、今回のイベントのキッカケになります。

「コーヒー片手にお菓子を食べながら栗山の未来を考える」をコンセプトに、ゆったりとした雰囲気の中、登壇者と参加者が相互にコミュニケーションを繰り返しました。

今後取り組みたいことをお聞かせください

協力隊の活動も3年目に入り、活動の中で情報発信以外での役割も担う可能性もでてきています。現在は、引き続き栗山で活動するために自分にミッションを課し、達成に向けて行動している最中です。これまで以上に町の職員や地域の関係者と栗山の課題とは何かをキチンと可視化し、向き合う時期に来ています。1日1日大切に活動を続けていきたいです。

(2023年7月取材)

インタビュー後記

望月貴文さんにお会いしたのは9年前、道庁の職員を中心とした勉強会「Do!21」の研修会でした。地域おこし協力隊員としての本業の傍ら、社会構想大学院大学・地域プロジェクトマネージャー養成課程や北大デスティネーション・マネージャー育成プログラム(受講中)を学び続けていることを知り、大いに刺激をもらいました。

かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表

くりやまのおとのSNS



2,000字から4,000字程度のストック情報を書き留めているnote



2022年度から情報発信プランナーとして加わった協力隊員と共に立ち上げた、普段の情報も織り成すInstagram